

要はないが、白石村治（一八六四～一九二九）は一般には知られていないので略歴を記す。彼は、元治元年十二月二十二日上州安中に生まれ、同志社、明治学院に学び、小田原、長岡、福島、仙台、奈良等で伝道に従事したが、明治四十二年末にそれを打ち切って上京し、古美術品の鑑定や売買にあたった。正木直彦とは奈良滞在中に古美術研究を通じて知り合ったものと考えられる。昭和四年十一月二十八日死去。中軒はその号である。本学芸術資料館の台帳には明治四十三年から大正二年にかけて彼が十数回も古画購入の仲介をしたことが記録されている。

なお、『法隆寺大鏡』の成功により、本校は大正十年から昭和四年にかけて『南都十大寺大鏡』も刊行する。

⑦ 国民美術協会結成

大正二年一月二十五日、のちに東京美術学校改革運動の母体となる国民美術協会が発足した。この日に確定した同会定款（『美術新報』第十二巻第四号。大正二年二月）によると、同会は日本の美術の進歩発展を図り美術家を保護奨励することを目的とし、展覧会開催、資金援助等美術発展に必要な事業を行うというもので、絵画（日本画、西洋画）部、彫塑部、建築部、装飾美術部を設け、各部選出の評議員による評議会と、さらにその中から選出された理事五名による理事会を置き、理事の互選による会頭一名を置くこととした。結成の背景や経過については『美術新報』第十二巻第二号（大正元年十二月）に詳しく記されており、それによると大正元年一月十七日、文展第二部審査委員たちの懇親会（上野精養軒）の席上、松岡寿がこの会を

フランスのソシエテ・ナショナル・デ・ボザールのような恒久的な組織にしたい旨述べたところ、黒田清輝が直ちに賛成し、また、岩村透は「美術行政上の諮問機関」ともなるような一大機関の必要性について演説するなどして満場一致で会の設立が決まった。そして、森鷗外が座長に推され、種々協議の末、黒田清輝、松岡寿、岩村透、和田英作、森鷗外、石井柏亭、岡田三郎助、吉田ふじお、小山正太郎、中沢弘光、南薫造が規則起草委員に選出され、事務所は本郷区龍岡町の岩村透方に置かれた。こうした組織が生まれた背景については『美術新報』は文展開設以来、諸団体の多くが存在理由を失い、次いで白馬会の解散が洋画界に於ける党派の掃蕩に役立ち、さらに黒田清輝の帝室技芸員拝命が洋画界全体の榮譽として受けとめられ、洋画界に親和が増したことが要因であるとしている。

大正二年一月二十五日に至り、精養軒で創立委員会が開かれ、国民美術協会という名称と上記の定款が定められた。次いで六月二十一日には同所で第一回総会開催。八十五名が出席し、まず次の役員が選出された。

評議員

日本画部 島田墨仙、中倉玉翠、荻生天泉、鐫木清方、長安雅山、結城素明、島内松南、島崎柳塙、平田松堂、山村耕花
西洋画部 藤島武二、和田英作、岡田三郎助、久米桂一郎、黒田清輝、岩村透、石井柏亭、中沢弘光、小山正太郎、長原孝太郎、松岡寿、森鷗外、山下新太郎、中川八郎、永地秀太
彫塑部 朝倉文夫、武石弘三郎、新海竹太郎、畑正吉、石川確

治、小倉右一郎、藤井浩祐、白井雨山

建築部 中条精一郎、塚本靖、大沢三之助、佐藤功一、武田五

一、岡田信一郎・田辺諄吉

裝飾美術部 板谷波山、津田信夫、和田英作、香取秀真、合田

清、結城素明、海野美盛、沼田一雅、河辺正夫、六角紫水、菅

原直之助、杉浦非水、小川三知、島田佳矣、保坂光山

(傍線は理事)

当日、文展裝飾美術部新設建議を行なうことに決定した。当時の会員は日本画部三十三名、西洋画部百二十四名、彫塑部三十一名、建築部十八名、裝飾美術部二十九名で、洋画家たちが率先して作った会だけに西洋画部の会員が圧倒的に多かった。なお、洋画家の中で太平洋画会の中村不折と吉田博は会頭無用説を唱えて破れ、退会した。

以後、同会はロダン展計画(岩村透がパリでロダンと交渉したが成功しなかった)、国民美術協会西部第一回展および講演会(大正二年十月大阪天王寺公園)、会員への揮毫斡旋等の事業に着手した。大正三年、学芸部が置かれ、

久米桂一郎、伊東忠太、○岩村透、○石井柏亭、関野貞、○坂井義三郎、○森田亀之助、塚本靖、○森鷗外、香取秀真、岡田信一郎、小山正太郎(○印は評議員、傍線は理事)

がこれに所属し、また、各部署理事補欠選挙が行われて結城素明(日本画部)、永地秀太(西洋画部)、朝倉文夫(彫塑部)、大沢三之助(建築部)、河辺正夫(裝飾美術部)が当選した。大正五年に至り、同会は後述のように東京美術学校改革運動の狼煙を上げ、美術界に一大旋風

を巻き起こす。

⑧ 学生生活

○西洋画科在学の頃 故谷口午二氏

〔昭和五十八年六月三日、谷口午二氏(大正七年西洋画科卒)を自宅に尋ねて本校在学中の頃のお話を伺った。本稿はそのときの録音をまとめたものである。なお、昭和五十四年『南日本新聞』連載「午二むかし語り」にも学生時代の逸話が少々収録されているので併せて参照されたい。〕

入学

私は中学の頃から絵が好きで、描いていました。美校を三年で中退した山下という絵が上手な方がいて、先輩の紹介でこの人のところで初歩の勉強をしたのです。外の連中は本郷とか川端とかいった東京の研究所へ行っていました。入るとまず予備科が三ヶ月あるわけですが、予備科に入るときは実技の試験はありませんでした。私を入れて三人が特別に予備科に入ったのです。三ヶ月間、長原先生の指導で木炭デッサンを勉強してからもう一回試験(ヴィーナス、アグリッパなどの石膏デッサン)があるのです。私は幸い受かったからそのまま学校に残りましたが、あとの二人はもうそこでほっぽり出されてしまいました。その二人というのが、絵も描けないし、まあ、どうしてこんなのを採ったのだらうと思っていましたら、どうも中学の成績で採っていたらしい。私も成績はそう良い方じゃなかったけれど、どういいうわけか三人のうちに入っていたのです。

西洋画科